

第三百六十七回 青葉会

平成二十八年十月二十七日(木) 午後六時〜八時半 文京シビックセンター五階D会議室

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 川口孤舟 久米五郎太 後藤保明 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯
山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎重
渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明
MH氏(新人) 村田くに子 山本三恵

《互選句》

八点

☆ 故郷や稲架上(はざえ)に見ゆる讃岐富士
(☆↓「稲架の上に仰ぐ故郷の讃岐富士」)

七点

色褪せし豊作絵馬や過疎の村
手枕の痺れて釣瓶落しかな

六点

☆◎ ゆつたりと二合半(こなから)を酌む夜長かな
玉三郎の「藤娘」

五点

立女形的美貌に翳り秋扇
秋日落つ食の細りし同級会
(☆↓「秋曇り同級会の食細り」)

天高し機音(はたおと) ひびく上七軒
津軽の深浦

◎ 海鳴りの募る夜寒や浦泊り
一灯 (猛・孤・敏・ゆ・允)

☆◎ とんぼ群れよぎる想ひや野辺送り

◎ 敦盛は今ここに生き菊人形
啓子 (堅・万・孤・敏・天)

四点

☆◎ 藁砧(わらきぬた) こつこつ打ちし祖母偲ぶ
(☆↓「こつこつと藁砧打ちし祖母偲ぶ」)

余命聞く病窓からの秋の海
弘子 (紀・万・弘・敏)

☆ この上に歌右衛門ゐたらし酔芙蓉
弘子 (紀・万・彦・三)

(☆↓「歌右衛門この酔芙蓉の上に在りし」)

☆ 調教師の悩みの種や馬肥ゆる
昇 (猛・万・正・天)

☆◎ 毬栗(いがぐり)の小枝の似合ふ文机
盛雄 (眞・万・孤・天)

読みかけのページを探す秋の夜半
そらお (彦・龍・正)

◎ 魚沼や蝗(いなご) さかなに茶碗酒
紀久男 (孤・ゆ・灯)

一生にさほど差のなし新酒酌む
孤舟 (堅・彦・弘)

(☆…「さほど差のない」のは誰の一生ですか?)

頂きに鳥の騒げる水の秋
五郎太 (猛・万・三)

(☆↓「山頂の鳥騒(ざゐ)しきり水の秋」)

☆◎ そぞろ寒襟立急ぐ家路かな
保明 (万・孤・H)

☆ ビル谷間百舌の鳴き声こだまして
全 (万・千・ゆ)

(☆↓「訝する百舌の高鳴きビル谷間」)

☆ 皿洗ひ柚子の香残る小鉢にも
全 (万・千・H)

(☆↓「小鉢にも残る柚子の香皿洗ひ」)

☆ 方丈記読めば眠れぬ夜長かな
健介 (万・五・保)

(☆↓「方丈記読み寝ねかての夜長かな」)

☆ 先刻(さつき)の字また引く辞書や秋灯下
恵洲 (紀・万・龍)

☆◎ 酔ひ醒めの一枚羽織る夜寒かな
堂哉 (万・孤・く)

(☆…「の」↓「へ」)

☆◎ 薪で炊く新米の香や母遠し
一灯 (万・孤・敏)

二点

長雨や古靴出して磨きけり

そらお (弘・天)

(☆…無季) (上五↓「秋微雨(あきついでり)」)

☆ 秋刀魚食ふお伴は諏訪の真澄酒

猛 (紀・万)

(☆…「真澄」の本舗は学友の実家)

☆ やや寒み布団搔き上げ眠りけり

全 (万・H)

(☆…上五「やや寒や」では如何? 下五↓「眠りをり」)

☆ 多羅葉(たらよう)に発句認め秋惜しむ

孤舟 (万・允・)

☆ 人老いて紅の消えざる烏瓜(からすうり)

五郎太 (万・三)

☆ 秋夕陽犬も眩しげ目を細め

保明 (万・H)

(☆↓「眩しげに犬も目細め秋夕陽」)

☆ 釣り人のバケツに静か鯨(はぜ)の息

弘子 (万・正)

長き夜を越えて沈黙ボブ・ディラン

健介 (五・弘)

☆ 菊花展笑みつうなづく車椅子

堂哉 (万・正)

熊笹の葉裏に灯る紅茸

一灯 (真・ゆ)

☆ 稔り田へ蒼き裾曳く津軽富士

全 (万・ゆ)

生まれ来て激しき孤独曼珠沙華

啓子 (紀・弘)

窓開けて冷気になりし朝纏ふ

全 (彦・五)

☆ 秋歌舞伎芝翫襲名おめでたう

天牛 (紀・万)

やきもきせしとろい女孫の運動会

紀久男

☆ こんにやくを励ます胡麻と唐辛子

猛 (五)

海を越え秋の雨降る終着駅

忠彦 (万)

☆ 身を焦がすまで曼珠沙華曼珠沙華

孤舟 (猛)

ふるさとへ帰りたけれど雁渡し

全 (五)

寢(やつ)れ風炉名残りの茶会賑はひぬ

五郎太 (く)

幽界の又の逢瀬も後の月

全 (堅)

☆ 駒場野に青き匂ひの銀杏の実

全 (灯)

SLへ手を振る子供秋桜

弘子 (三)

☆ 風邪の身の右へ左へ風の過ぐ

全 (万)

一点に絞らる丘の鰯雲

全 (保)

☆ 萩のトンネル抜け来しならん髪の萩

恵洲 (万)

不揃のりんご愛らしコロコロと

ゆたか (保)

底紅の紅ほほにさし今朝の妻

全 (紀)

浜菊に屈めばかもめ鳴き渡る

一灯 (H)

思はずもセーター取り出す朝(あした)かな

啓子 (紀)

☆ 大手町ビルの谷間に覗く秋

全 (龍)

命思ふ父の命日冬立つ日

規雄 (孤)

香り良く鴉に勧めし榎櫃(かりん)の実

亜也 (紀)

鳥取中部地震

天牛 (真)

庭に出たと妹の返事秋の地震(なゐ)

● 次回青葉会

十一月二十四日(木) 午後六時〜八時半

文京区民センター 2F B会議室

△ 当季雑詠五句 投句二句

● 忘年句会

十二月十六日(金)

鈴木演芸場*昼の部 (十二時三十分〜十六時三十分)

↓ 神田・岩戸 (十七時三十分〜二十時三十分)

平成二十八年十月句会報

一 月例会会場移つての第二回は、文京シビックセンター五階の会議室。天牛さんから九名出席。投句十名。紙上選句は先生含め十二名。いつもの猛さんの進行役で順調に推移。ご覧のように猛さん、昇さん、盛雄さんが高得点でした。弘子さんから「萬緑」来年三月終刊の経緯、五郎太さんから学友の草田男の三女である中村弓子御茶ノ水女子大名誉教授（フランス文学、哲学）の俳誌寄稿文のことや高橋睦郎の「俳句甲子園」見字記の俳誌掲載について話題提供ありました。二次会は、飯田橋の焼鳥屋（一灯さんいきつけの店で安くて旨い）へ八名参加、皆さんご満足で解散しました。

二 関係者近詠

かなかなやかなかな色の樹肌抱き	万里子	九品仏拝みてよりの秋思かな	允章
かなかなの片羽微かに動きづめ	全	ばらばらと小舟浮かべて鯨の潮	全
かなかなやじいじいみんな皆抑へ	全	夕空を騒がし渡る椋鳥の群れ	全
季移ると松葉牡丹をまとめ買ひ	全	真夜中の遠きサイレンちろろ鳴く	全
風止みて噴水の音の閑かかな	全	八方へ野を統べるかに葛の蔓	全
萬緑の映る湖面を幾巡り	全	秋徽雨鼻の欠けたる摩崖仏	恵洲
満月と明星の間へドローンが	全	仏滅など怖れぬ若さ秋高し	全
老人の教会枇杷の挽ぎ手はも	眞希子	仏頂面の小憎らしき子秋暑し	全
犠牲者の数で括られ夏の星	全	草冠に秋の字ハギに適ふかな	全
猛暑日の一日パート魚を裂く	全	・・・「大鉄会」 十月	
妻よりも嫁の四十年額の花	全		
ぎしぎしの抜かれて句座へ横たはる	弘子	秋冷の夜をはみ出す思索かな	小泉八重子
親鳥のご多鬼ともな巢立時	全	ふり向かず次を指すや菊香る	全
誰だつてここは空見る梅雨の沼	全	秋麗に「白雪」を酌む誘ひかな	盛雄
風鈴の優しこれから越す町に	全	菊人形武士（ものものふ）は今ここに生き	全
蝉しぐれ三世の因果声かぎり	青史	子の酒量われを追い越す良夜かな	全
独り身に戻り花紫蘇買ひに出る	全	句作りは所詮不得手よさんま食ふ	健介
海老蔵夫人の快癒祈願	紀久男	欲得の薄れし夜長二人酒	全
祈りを成田屋鬘羅羅に	全	句集成る！芝居談義の新酒蔵	紀久男
殺し場の見得も涼しげ仇役	全	温め酒聞き上手なる女将をり	全
・・・「萬緑」 十月号		・・・「きさらぎ句会」 十月	
雲にのり風にのりして小鳥来る	規雄		
・・・「NHK俳句」 十一月号	正木ゆう子選	象消えて濠の深さや冬景色	正明
嫁御来てまず蚊をひとつ打ちにける	丹野敦雄	アパートに空室多し年の果	全
・・・「俳句」 十一月号	今井 聖選	水澄むや軽鳴一家一列に	允章
仏蘭西は船で行きたし巴里祭	丹野敦雄	びつしりと団栗溜る径の窪	全
・・・「俳句」 十一月号	星野高士選	七五三ここにも青き瞳（め）の親子	全

三 高橋睦郎選「銀座俳句」（「銀座百点」十月号連載）より冒頭の選評を転載します。

「いまや松山市の名物の感のある俳句甲子園を見学してきました。俳句というものが座のたのしみ、の文芸であると同時に、いい意味での闘技の詩歌であることを、出場した高校生たちの新鮮な作品と真剣な討議によつて、改めて教えられた思いです。」

四 黛まどかの近詠五十句の内、小生好み五句紹介します。（「俳句界」五月号より）

。 小走りに舞妓が過ぎる花の昼

。 汚染土の袋の山も夕焼けぬ

。 三津五郎勘三郎の蛸とも

。 花ごろも仮設住居へ戻りけり

。 滴れる山から山へ只見線

五 句友の中山芳博さんの追悼句、五、六名の方々から頂いております。

次回掲載しますので、今月末迄にご応募願います。

平成二十八年十一月十三日

紀久男記